類聚名物考

八十三

和書門 類 二七七九八號 一一二函 三架 一六一冊

内閣文庫 和書 類 二七七九八號 一九一冊 二〇九函 一四架

内閣文庫

番號	和 27798
冊數	156（96）
函號	209 106

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館 National Archives of Japan

言語部十六
同 十九
同 廿
同 廿一

日本政府図書

類聚名物考 八十三巻

明治[illegible]年購[illegible]

日本政府圖書

類聚名物考

言語部

巻之十八

は

巻之十九

ひ

言語部
巻十八

二言

母

丈八
父母ハ天の始めとして諸子の出る所の本也とに見ゆ
母の胎よりそ物ハ生れ出る故子母と云ふ是也亀卜釈
との料を云ひ又済民要術にも物類の母と云ふ事多し
行云とも用ゆ

聖人ハ善を母とし悪を子とす 老子にも万物之母と見えたり

巻之廿

巻之廿一

へ

ほ

韻書に字母字子なり唐書に後母なり地志にも嶺南
の瘴母と云物也のひかりを颶母といふよし鑑方の方書に
○○とて瘡母と云も瘡のおこるものよりいへる名ならし
ますに瘡母なり疹瘡の母也字の周澤卿が云代ハ女の瘴瘡
を療治せしに頭臉其の不中指を空敷の指を別ことをいへり
その和ハ大概をかきたりしにその瘡窠の側を空敷母といひ
しもに今俗にいふ経絡の指を知ける物料痛操は中指
の側を母といふなりとしるしたり

○まる
俗にいふなるといふハ二百十日にして人お出して云云之二百の日にいふなる
といふをもとにいふなるといふハ其まゝいふ

○明日記道保元年有云次朱雀院之朱は俗云腹氣又
俗云今日を頭痛於今年も浮腫も増して六日俗
俗云天敷の頭ハすこし云面目俗如様俗長安石なりとも
可尋候中事云云

むさし

万葉巻一　将　當万

○万葉別記一　為當（ハタヤ）や　今叔危条獨渡年　淡云と云ふ言ハ果して
てふの之意にハ何とも當といふ事川等乙将ヨリ事と御て淡
云ハ果してとふとも云まてさし當ヨ言ハ一稗ハ文あつれまゝ
云とハいへれ奴そ小考六ヨ　さて廣嶋多　ゆえ織行　やう々の君
ヨ當不（ハタアハオラン）為将ゑ　古今言ふ條ヨコとひぬれハ今むきて同し　為ふもたる事
を心ゆれ將ねゑんと疑ひて吹ぬかと古今集ハ巻十の言ハ華して

いふ意也又古今集に余阿八追ともよみて人多くよむ事にて行もよし
当其 含之 余の類は古事記萬葉集新撰字鏡和名抄にあるか明らかなり
あたまあるくめしまゐらすゐね云々といふハさし当りて云ふ言
之同集に存ともあり又行也字明らかなれハ高行つ字定稽ゟよめる也
る事も含む也○冠辞考に詞ハ恨みといふ意也詞の中にて百を
かさねて上に書ける此也

○はしき　愛

はしとのたまふ事の心は愛しきやしともいふとも同じ意也と
ハこゝろくしむの意也はし鷹はし娘も同じ事なり是
字ハ椅柱笑齊るといふハみな借字なるをつたへたるなり字
まつはる心のこといふいふはくへうち皆よみ両と云ひて
ともあり

○古事記上伊耶那美命言愛我那勢命為如此者汝国之人草
一日絞殺千頭尓伊耶那岐命詔愛我那迩妹命為然者吾一日
立千五百産屋是以一日必千人死一日必千五百人生也

○ちやせん

これはちやせんとて御祝に用之 茶をたてる具也と云

又これもちやかせんと云之

○拾玉集一 葵

賀茂のことしはまつりはてゝひとへ賀茂の社なとにかけたのまれ

○大鏡第七 後度八 をとりふしにかゝるへきらちのみならねと

まいりこゝとをちやせんにて

○山家集 夏 早苗時鳥

時鳥〔考〕捨女のちやせんにて山田の早苗たゝむとる

○夫木抄七 西行上人

あう逢　居易

秋の海たゞよふ撫の　はてきえて　おぼれたる言之　居易も
まよふことよあり中すに投まづすとも俗をまかすかはなるとふ
もすめ言れるはぬも

○法論草上 然　一人の所はまだ蕨さ逢之　業人に会人なと語まる
きそハ、ついでに、居給ふまでまゝそこはハまよふれまれど料ま
るべかし

○楼能日記 六下　いたく　いかで逢ことも頼をと始はじめにいまだしすさこの
ふかきことゝかりかとはおもきさまあると言のするはと浮みし
まゐる乃まハ六七れうせるれぬと言ひし奇りゐるまて
えまりけるはやまてこちるそれぬ

○おもげし　烈

按察集四　百首自序暮夜
冬きのおもげかり　つる暮こそ中まれ行雑人ものこる　はまま

はこ　箱筥　下再出

令子唱へしと箱寺箱とうろくかへ云訖を云之　箱ハ篋字之
箱の御所くとい云之万葉集ニ山箱とよめり　いかにもさきとよめれ
同ー云之

○大鏡第七代三条院　者にハ拵箪紙なとの此物の事を取出て
しけるに何首のかるて不思の箱と思ひけれハ
ますさるこれさる　ますこし御後ニすゝ之とこそ思ひ侍りし也

はじめ　初　始　首

○一切物のはしめハ始之の云ひなさハ終ハ座席も物のはしめに座ニ入れ
是首之

まだら

○斑を訓まだらといふ物のいろくにまじれるを
いふなりことはまだらといふ事は拾遺集に
まじるよりいへるなり斑の毛のまだらなる仮名
をまだらとはいへり

○拾玉集一　月
あらしふく木の間の月のかげはまだらにみゆるけさ
○拾遺集十五　みつの花とも西行もよそにけるめのまと
あらはれけるまだらなる
おほやしくはふるまだらなるかもしれずもしくは
おほやしくは不審之まだらなるべきなり
あまねくは

まだら　斑駁
まだらに同じくまだらとも云ふ仮名にはふるゆきのまだらに雪
まだ花に庭もまだらにみえけるよあり

○白氏文集廿六　南園試小楽　律小園斑駁花初発新楽錚鏦教
欲成紅萼紫房皆手植蒼頭碧玉尽家生

○拾玉集一　雪
冬さえのあさは庭もまだらに雪ふりて谷のあまたの山里

まだら　斑

まだらとは字同　真虎の毛なる斑文あるをいふ也

○玉葉集

あやとれ露ぞかくるなる庭のおもての花やちる人

○まろ　まろと同し

○古今和歌集　後撰集　不載家集云一本

○鶯あけ　古今

ねえまちし六月の月みまつかきりはひのこしとはいつからまさん

をしれ

をしれなきも　年の奈半はあはれなしれ名之物の今りしき
出羽にあらしとふらふのまぬ意之意なし九石なむし京
とえくし秋ひ世之

○古今集序　さけ翁人も所の色たへかへしてらん後なす人を
人もをろこらよするをつけける

をしれ

○更級日記 菅原孝標女記行　湘隠居の下に京は蔵も知らぬ人にはかれて
宿もとむる不をしれとそ　いとはかしれなる松の山家見え
はるかにいふまこと

○古今物語　○かまへをしれなるをれ

○後撰大納言　岩か未葉を見てまりて
　あのうさ我さしれはをしれよ如奴へしこ之へは知のとしれのを吉
○後集　同上
○拾遺之志集
　余君よこ為てされ気人をとを之し人をしれなる秋の咲なは

きやう　幮　うすきぬ也

きやうハ今の蚊帳を云歟　以て蚊を防く也
きやうハ今のかやの如きものなるへしといふ
今のかやをいふ　和名抄ニ幮　野王案幮帳也
幮似帳而小云々

○きぶ　[illegible]
○きやうは　[illegible]

○萬葉

○古今集十三 夜歌
五月雨のそらもとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなくらむ
○古今序に 古今をかきあつめ
[illegible]

はさり　佐渡にて物のはづれたるをいふ

○小倭花記ハ [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
子ニ記しこ [illegible]

はなる
よしばなるぬしぞめるのまとひいめくと云事同し　源氏物語
まちたまへきざみぞめるなど云
○はなむすこして老舗の友は義之侍りきめくといふに同し　云々
とて緒も似たり
○源氏物語　第廿巻

はやく　早
はやくよりといふ事なりとても於ひたすらなりと云事同し
○紀貫之集云
いりの月見ばたら物をはやくこそ人を思ひそめてし
○後撰集十二　恋四　めぐりあひし　右近
大納言　我を八雲しはや雲はなても人にこひしきを
○山河水源集
草まきく伊勢の絵に山川のはやくよりとこひいひけり

はかる

○大鏡第二 太政大臣良房公之 しろしめしたらめと 物を申 はかる
めれハはかる侍る

はかる　謀

はかるハ謀を訓て古語加布とも訓り 俗に古来次とも云
まゝ此の言ハ人にたはかられ かまれたる事とも なむかられ
たる事と云之古ハ物続きも叙説の結之 体の語に接反
とゝまりて はかりこと之 と云ふ之の言なり 又計略をも
訓り

○新古今集一
はるくれは あひたに花さきたる かすみて風のはかる也けり
○後撰集六 秋中　　読人不知
白玉の秋の木の葉にやとれると見ゆるハ露のはかる也けり

きくさ

延喜の式にやうやまへといふは日下く河東にある式なり
伊勢物語万葉集には吉備とかきたるもあれは仮名也
なり菊をきくと訓するは也へしつれ

○萬葉集に天平寶字の年の十一月の坂東を風の吹荒くていふへしと
いふ所もありて日次なる所の名なる哉
信方当時名ハ毎日にやまとへと風にまくへてハ所と呼なる

繁多　はんた

○後漢書下卒蔡邕傳臣聞天降災異緣象而至辟歴數發殆刑誅繁多之所生也

国立公文書館
National Archives of Japan

またさむ

この詞に二の意あり　秋の末に風の身にしむ頃を　膚寒　皮膚のさむき

さむきといふ又ハさむき八詞を　肌寒　訓るに　二つあり　細層かたにハ

肌を司るに書きなきを　不足しては　さみしさいふへきところにすべて　秋風の

身にしむまでのあはれまたさびしさの意を含をいふ　人毎の　ころきこゆるなり

なし

○源氏物語桐壺　野分だちて　にはかに肌寒き夕暮の程は

常よりもおぼし出づること多くて

○新古今集

秋風のやくまに　寒く吹なるを　まつの上葉の　あかき思ひまき

西行法師

○夫木抄　十三

狩するは　狩人の衣ハさむし　伏保の山寒　立やしぬらん

やゝさむ

この詞の中ましをいひのさくあさくともいふもおなじ詞

なり　能く心にしるべし　あなさむきともいふ

○凡河内躬恒　新古今集

やゝ寒き　秋のゆふ暮　ちる花とこそ　たぐふらめ

○古今集

あらぬく
漢武故事に杜甫老泉といへるはあらまほしき人をいふ又日
萬葉集にも此詞あり俗に惜しき拂ふにもいふ詞也惜哉といふ
なり

あるへし　時によりては　あるかたとも
○西鶴集
いつとてもあるなかの春をまつ人に出見え〔二月立之所〕と浦の人といふ人もあり　八八

あふるほと　あつかれとも

○良風集
みなせ川ゆくをこひたえまし　つひにハいそなると見えく（しく）
○古今

あけき　遥香
○紀貫之集六
人めもふことハいつなるあふみのや　以方も思ひあけかたの人
○後撰集　十九　離別
菅原縁幹か女
君があるの西の里へ行ことの此はなれ（九）つの山のあけきやなそ（よく）

たくむ　相合

これハ手と明をのみとをこえてふ家相をひろけかれひさくをの
相の事へたくむとある故をのことをとりて人の子をそだつるとも
かくいふまや生くさく小児なと今の雛も人のとりまかいて拘
合せ手針ハたくむなといふ之古人を渇るに依渇之花のつたむ
といふを万葉にハ合とたくむとよりたくむに同し

○源重之集
たくみこし君をとなみにあらしてより大方こそかれてありけれ

○金槐集上　夢
たくみする雲のゆきたくみする夢のまやむしこそすれ

○若菜集
こゝら山花をとうふに出たくての末のたくむ花をこそすれ

○又古語曰　修装

○源氏物語相生　郭公
あるハ心こころすきまきこてまやと行すくさ
月日をたくみていとあそびかつきハ心なるき心さにあんいもける
き人もいりまとおひやりつくともまたぐりまぬおれつるき
と今ハ程むりのるるたるえくさ御しめくるとるやうにかや
申けり

○夫木集
あめ澗の廿九日轉したくみ事ハ荒黒の花てち此衣かゝ寒

まがし　遠ミ

○伊勢集
まがしくし雲井をさして行雁の中々まとろくおもほゆるかな

まとゐ　まとゐする

○法の網絶ハ三年ばかりなるめの　つね紫東なとにはあらで　まと
ゐもこへたるがごとく
○来暦なとまとゐハ円居なと之
○花月にをは様之今衣紋男の詞にまとゐといふ事なハ
まとゐを円　なれとも知らぬ事にある事なれハさもいま
すれとも其の事ハ円居なる事にハあらで衣の生たるなどの
かいひろげぬやうなるにかひつくろふをいふ也　黄紫
束とて垂纓円中に衣の名之同し紀之まも紅梅
のさぬ也きるとまとゐてさとおもにおのにハ円かさなれ

是といふハ野あらはれに里ともれふかへし　宜ふるとて
京あるの都外さこのなれハふぢふも

まちやの　　草番見

○徒然草第十二 二十六 世のあはれ之鹿やのあるけしきにあはれさもよろしとも
まうく人あらくれとふしあるあひし兼好法師のよしいひぬ
あらまし なるにこそさまとも堂見の達

まろやかに

○大鏡第三　太政大臣頼忠　又　此大臣殿ハ時の一の人北方
子まで元もおそれまろやかにおはしまして、前大臣殿の御婿にて　おは
しゝかハ御子西洞院の御方にも常におはしますを云

ましら河

○山家集　端書　略

あふれきく波中の流し元来しらでかよふ波魚ともよれハよすか

まかく

○夫木抄四　花　大納言経信方寝屏風　春中納言道房

やまかはのほとりの桜まかくしてみえぬも花はうゑ植ゑてけりし

たなし

○後撰集六　秋中　寛平御時女郎花合せに　藤原興風

おかしまころ名ハ立ぬとも[illegible]とかくハまおくまろし

さいはひ　吉兆

○明月記天福二年八月六日　後堀河院崩　定時許人々[illegible]

夏[illegible]後院殿上人二人[illegible]定家之[illegible]

被仰御[illegible]遺例云々

蕃昌　はんじやう

○淮南子五時則訓　養長化育万物蕃息以成五穀

萬端　ばんたん

○後漢書五十九 竇武傳上疏諫曰臣聞明主不諱譏刺之言以探
幽晴之實忠臣不恤諫争之患以暢万端之事
○文選 名都篇連翩撃鞠壌巧捷惟萬端○注史記曰魏公
子賓客辯士説王萬端

發明

○こゝろのもとハ発幽明闡の意なる所をば俗にハ敏聴なる
人をいふハこの人よく物をひらきはじむる智恵ありて
いふ也
○後漢書卅四 徐防傳上疏曰臣聞詩書礼楽定自孔子発明
章句始於子夏其後諸家分析各有異説

莫大　むくたい

○これよりおほいなるはなしといふ事をおほく名目のぬくして
しといふ之儀まれもきこゆる事(子)を用ゐしなり

○後漢書甲衆成靖王傳専已出暴慈罪莫大甚可恥也

○白状　はくじやう

借(供)出　耆婆須我　云々　石示の小説ヲおか

はしたなき　　云半事河海抄

物のころまでかろくあそびはなしたといふ事を詞はすつはし多
なきをいひなすきをつくるも以くも云の意にハはしぬかなしれ
ならめるを詞もなきを云ふへしおほやうまひしきかたといへるハはつる
らまいへは上﨟ハ物のうちそろひのふ施するに上﨟い事の
そろなるハ婢をなしたるともいくるかめく事の詞ハさるな
定めりしきするまひなすときいふ之なしたなむるハ云在なか
なるをいふ之

○源氏物語相並まろこしまかす事のおそろしきことさせ給連阿
かすそれとやうくはめのそうすもはぢきなる人のまそなすこ
ゆきになりて揚貴妃のためしも引出つへくなりゆくにをと
はしたなきいおほかれど云々

○
さもこそハ秋なる嵐に宿かりめはなれし松の嵐の板戸や

さもなき　是也　心得顔

さかもなき　さもなきといふは同しくもハ深く思ふ時詠之

○新古集
さもなき世をすてはてし人の中有りとなりてさえまさりけり

○落栗元去集
さもなき好こ足らぬうれしさハいつはれたるこそ思ふらん

春之部　　　　桜花

○六百番歌合　春　二月三日　十五番右　家隆

はるといへは　としにまれなる色をみる　なく思ふ花に心して

判詞右ハ天竺千花桃李の盛ぞといへるなるべし

さしたるめ

さみたれは　さみたれこそ　あやめの節ハ　あやなる　袖のかわりにし　ぞすゞし　　家隆　西行

いひきこゆる言也

○源氏相撲　相模　又ある時ハ元さへあらぬ　民の戸をさしこめこゝろ　さかゆる　月をみよとて　さしたるあやしき　花のまに　時も都より

○五月雨にまつ之まへりしむる言也

○さちはふ　　　　さちはひ　祝詞

志良不ハ幸之良不の義ハ寓とされハ祝詞之やすくさちはひと
言ひのことハ利之これハ不忘りと依るやまとさちはふといふ詞と
かくのことあはぬなるへきさちはふといひさちはふなるといふハ御参言居
の意と知るへし

○めれなのきし　　後宮書院より勅によりいはくの後宮のめさふ
らひしいなるさちいはこのことをかえよおのつより法さちはひ
に一とは中まゝいはくの法を見られ

はやなから　　飛早

はやハはやくといふ字同しく初めの字体いふおいてまと
かくといふよ同しはやなからハ昔のまゝそといふ言之西上の
書まも早字をこのことの字用ゐたり

○いせ集
山川のおとにのみきゝしもゝしきを身をはやなからみるよしもかな　　○後撰集十六雑四

○凡河内躬恒集
きのふまく伊勢の館原の山川のはやくより我こひわたるかな

○後漢書 五十九 何進傳及帝崩碩時在内欲先誅進而立協及進
從外入碩司馬潘隱与進早舊迎而目之
○今案に早舊とハはやくより舊知己なるをいふ之早字
の用ゐやう此方にもいふ事あるなりけり

ちくとる
○古今抄
草隠　雲井に若(若)葉はやくも鶯の羽や若ニ(に)なり

ちらかす　散
古事記上に蹶散（フミハラヽカス）を訓す　ちらかすハ知良加須といふなり

○古事記上ニ天照大御神之堅庭者於向股蹈那豆美如沫雪
蹶散而伊都之男建蹈建而待問云々

○むからて
たむからて十日ノ頌之
○夜半之集
さしめさく まれにを焼の 蕪村
さきまて はうつ秋の名残か 京

まやくまり 従早
まやくハ早字を訓てまくかけまりといふに同じ 初より
といふ言なり後撰集に早舊とかけるハまやくまり 舊知
の人といふなりまた此方の国のうちに見えたり
○元河内新撰集
まさきく伊勢の諸磨の山川にまやくまり 京恵にて来
まきやーー 万葉別記
ーり忘中し

春雨はし　相模

○拾遺集 春中 夜　いを

春たれて出月 移とも 時鳥啼なきに枝かはりせよ

まなうらこもる

○夫藤要集三　夜の清涼文任やられる　花詞

いろもかも耳なれにたる春毎の花のことはもことの葉もなし

まなこうるひま

○六百番　寄恋　春曙　廿八番左　花寄

霞の花宮にとちられさまそこもれる宮の明石のしたにあまなるか　宗家

判云左の霞のはとあけるやまのこかるはうらさきかなや

花宮にとられ宮の明石のといふは秦城楼閣煙霞裏

といふ詩の心にてまたしらけるへし

まなこうるひ　元稜　初盤　人事儀礼部

まひもこよふ

○日本紀神代巻下

林慙

○文撰　北山移文　孔徳璋　林慙　はやしのはぢ　間愧　たにのはぢ

故其林慙無盡澗愧不歇　○注李周翰

日説林澗以申其愧也

まゆく若菜

野辺の若菜の路径之柳と若菜くさはまつらひとふそめよ

柳の青　若菜　若菜をいもろくしかりぬるもいそ

○後拾遺集十六上中宮の御方の上の人々　柳わかなを

出でし日後宮しく同じやうにさやかに後拾遺のかへの柳

さまかりたの香まて後柳を春さまつひしる　又梅は遠き薗

柳まうすえまかりしき人のさまかハぬ春まても春さまさ

すまかり

まちとられ　いさね　　花のちりかた

○拾遺集九　まきれぬの郭公なし　　○後撰集

花の香のいろをも香をもいふにとの　かなるハ若く後詠り

○後成柳経相蓮楊貴妃のかうちハ文ミし王昭君といへ蓬華可

きりまちれバいとまふひ野ー　太液の芙蓉未央の柳うけ

まわひこうしかはれ踏あめいつる　まさひハうるハしくさろ

なるあへうしろら　うけなりしをあかれ　いつる花のかゝ

まちまち　ゆへきかくぞなき

言語部　巻十九

ひつ

ひち

ぬるゝなり　袖ひちてとあるもいへり　比知ハ泥をかけて　泥
なる比知ひてぬるゝハ　かはる比多す漬の義にて漬るゝ法なる
まうしまうし比古路の　ゝにを漬れハ　天も申れハ比定之

○後撰集
天の河霧たちのほる七夕の衣の袖もひちまさるらん

○古今集　一　春上
袖ひちてむすひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん　紀貫之

○顕注云　袖ひちてとハ袖ひてゝたゝふむかしハひちとハいひて
とくひ　ひつるをいふむかしハ袖をひたさすといふなり

磐石固

○文撰古詩　良無

虚名復何益

○後撰集 十六雑二

読人不知

武蔵野ハ袖ひつはかりわけしかと若紫ハたつねわひにき

人しらす

同十七雑三

瀧つせにたれ白玉を乱けんひろふとせしに袖はひちにき

ひた

襞積　きぬのひだ之文撰によりて衣部に出

ひつき

餞君を比都藝の見古と訓り　ひつきハ引次の意なるよ
しかれば字を用ふべし　又天津ひつき　天津ひつぎとも申之よし
こよなく貴御をも　ひつきと訓めり　是ハき字を借て意を
べし　其の放を思ふれバ之又　柾ハ椙槻の名なり　是も同訓
なれバ是又借て書之　万葉に天子の御位を天津ひ
つぎと申なるハ其の意ハ天孫より生ましさく日継と申が
めでたきなれハ其の日継の末を継ますよしにて日継とも申すや
けん

○万代集　夏歌　左京大夫顕輔　○夫木抄　雑
ことわりや夏の尾山に三輪や宮居ゝ手向にひつきなるらん
○今案に此哥のひつきは也まとつきなるの誤にて緯なる
なるへき物とも意にて解えかたきなり

ひーと
ひーくともいふなりいふは俗語にも今の俗語にもひーと
切れぬをひーとかゝらぬといふは古きことはに同じ
○拾玉集四　法楽百首　中巻
いにしへ人もたえぬ高池のひしと藻のなきひとまもなし
○此歌ハ池の水草の茂きにひしとかけたる詞也

ひいる　沖

沖天なと文選の訓に比伊留とあり儒者訓なるへし

○文選　天台山賦 孫興公　王喬控鶴以沖天應眞飛錫以躡虚

○史記　楚莊王曰有鳥不蜚蜚乃沖天

○ひづち　　泥漬　万葉　　ひづち　万葉別記

○万葉巻二

万葉考別記二ニの言を泥打とかける多くあるとおもへは借字にて此巻
の末に泥漬とかいてあし之比豆知と訓るは集中にかなにかきて
ある言の意は物の泥に漬てぬるゝを云すなはち本言
あるまじ なるとぬるゝをもつて也且こゝろ得て漬との言
又ひさしことは二四神名言にも見えて比比治の治も紀に吉と
一紀を乱通あせて比豆知ともあるを又紀の豆知と神名に治
とある所に比治とも〔くえ〕○冠位比治は神代紀に泥土此云
于昆尼といふて泥と漬りてある物を泥打家と比治加多は
世ひちのちを漬ていへは謂也

ひろぐ

ひろぐるとも同じ計首の歌は是也
○更級日記 数ある諸の木 岸の中と共にゆきにある此はいはゞ
しつる 物こなり山の端錦をひろげたる やうなり

贔負　ひいき

こ事之伐俗音字ひいきと訓ハ備(ビキ)の音の轉也

○文選 第二 西京賦 張平子 左有崤函重険桃林之塞綴以二華 一七
巨霊贔負 備許 高掌遠蹠以流河曲厥跡猶存○薛綜注贔負作
力之貌也

美談　びたん　うまごと　よきことむ

○後漢書 廿九 王望傳不変君命擅平二國春秋之義以為美談

○文撰 勧進表 劉越石 昔少康之隆夏訓以為美談○呂向注曰美談
美其成功談説也

○公羊傳 魯人至今以為美談

披露　ひろう

○明月記寛喜三年七月廿六日　云々　又彦風之事成人ゟ不云

而陪従輩秘る不披露云々

○後漢書五十蔡邕傳以邕經学深奥故密特稽問宜披露失得指陳政要勿有依違

○同七十四　列女曹世叔妻傳妾昭得以愚朽身當盛明敢不披露肝膽以効万一

秘藏　ひさう

○維摩経五問疾品五　一切菩薩法式悉知諸佛秘藏無不得入○注什曰如密迹経説身口意是也肇曰近知菩薩之儀式遠入諸佛之秘藏秘藏謂佛身口意秘密之藏

○後漢書十上鄧皇后紀殤帝康陵方中秘藏及諸工作事減約十分居一

○注方中陵中也冢藏之中故言秘也

尾籠　ひろう

○拾玉集五

志之不之中状尾籠候返信謹言

比興　ひけう

中古の詞にてをかしき意なるべしといへり

○沙石集 三上 げにこそいさゝか貧しければこそ猿これ猿にハ出家したる

しかれどもくそ顔なる卿なるまじらひと中々にきれとて一座の

比興にこそ侍りき

便宜　びんぎ

○前漢書 七十四 魏相傳 好觀漢故事及便宜章奏

○同 七十九 馮奉世傳 世以衛侯便宜發兵誅莎車王

ひろごる　　蔓延

ひろまるといふに同じ　ひろまるはつゞくとの蔓延するをいふ

俗にはびこるといふにあたれり　はびこるはひろごるの俗之

○源氏物語 桐壺 源氏 皇子もいとあはれなる句を作り給へるを　かぎり

なくめでたてまつりて　いみじき贈物どもをさゝげたてまつる　おほやけ

よりも多くの物給はす　おのづからことひろごりて　もらさせ給はねど　春

宮の祖父おとゞなど　いかなることにかとおぼしうたがひて

なんありける

ひきこと　引械

倭名引手とは車用ゐる物也と見え引ものなるを引こと云ふ也とし
源氏の車は車といふ皆車の前にひく物引械といふ　源氏物語
に源氏の君を車にのせて引こゝに待る由ありと帝の御前
にも見ゆ　おとゞくんなめり

○源氏物語相並　ひきゝるの長なきさゆすらぬ身にもいと引こさまほし
う葵とは云ふころこそ人々なれまた世のうけひきまま
ことなれハ見しく物がたりもかなくて色にも見えなかりし代
なりぬる猶さハりありしとれと

ひさめく

○拾遺集　中比空也上人有りける都の名僧時々は詠
しも七日の別時念仏を京にて行ひ京中の諸俗男女時
ありて諸聴之　ひさめく　咲つきひさめきて　拝み
とこそ云ひて物ねまれり

ひとがら　人幹

○山家集　○古今
あはれなるひとがらをまもりひとしれずかなしき人々の秋のあはれハ

ひとえだ　一花

今の俗にいへし芸[音]子又ハ一花之或ハひとえだ氣

なとも いふ 是て 人の 伽の 藝子 好行と云 花代と い

のかひハ引しきあやまりまとい之

○ま木柱

何の浦へいきかへり之花の香のひと花橘を[川]へるひまなり

亭子院高房花橘　忠岑

ひとやま

○源信明集

ひとやまはゆきはけるにまうでゝにゆかむときれ

○いきまひの祀 又仏名記 ことにまれなれかみなかくしひとやまは

なね道 されハいきとしとてもとまるきまはてなふ

ならくいそきときね

ひとこと　人言

今ノ題 万葉集にハ人言とも人事とも書れとも今ハ仮字なる 一

○後撰集 十三 恋五

人言のうきをきく時はつかしき我身にあまる　よみ人しらず

あのひとる人に　よみ人しらず

人言のたのもしげなきハ難(雅)波なる芦のうら葉にむすぶしも

ひとしき　見えしきの言經之今ト子仮名なるを

○情懐見花ハ下いとおかしきに時鳥をきゝて見えし人されハ

いとおかしきにうちいらふさへ花ひとしくうちて見えしを

しとをおもひていとおもしろかりし(と)を思ふ程に

一の

ひとしほ

○一入をひとしほと訓るハ常例之事なれとハよもえりねとも也
を染る之事ハ紅之本ハひとしほふかきはしほやしほ
なまひいろ色のこきをいふ之それより轉して何事にも
ひとしほ面白うき或ハひとしほ尊さなどいふハ俗なる詞
にてをさ詞の轉化之ものいふ詞をよくわきまへてさるべき事也

○拾玉集七　秋夜仙郷

今ハ山寺にて有明月とかきくもれたれハひとききよめなる

○ひたゝく　ひたゝけたる　滑

滑を中古より訓せるなれけなる言まて　ひたゝけたるを
いひたるなり　泥や土涅なとハ泥一の意まてひとこもりて言か
詞とも用ひて泥なとの意なり

○狭衣物語比叡をたよりとつまの石なつくみえも心のれく
をまつせちやしなとにもあまりはひたゝけたる人はさなからの親
小石山へまいりて又家出ぬるえけり　意けしなるの人とにぬれ
もとまりよそなりゐなのゆくゑもみうくてさまやとハなとにも
あまりなれもひたゝけられもえこそ家らにハめられしくも出すかなの岩
つもなりやあいぬるとあるなと心ちなきいゝるとひて　彼所ハ山への人まて
けるなし

○後漢書袁紹傳紹上書曰云云則臣之好卓未有纖芥之嫌若便苟欲滑泥揚波偷榮求利○注滑泥也楚詞滑其泥揚其波

○滑泥をひたゝけてと訓せ

深武のひたゞけ
たる之をひハひた
之ら云る今遠き
と云意なるへし

○今案にひたハこゝの義又 下成との意にて ひたハ直なる也
ひたおもても直也又ひたかぶと二百年餘ありと云ハ下皆之又
ひたさわぎひたものなどハ直なる意にて ひたやごもりと云
るハ[illegible]の意なれバ[illegible]の意にて物の外の意を
[illegible]海神之故だけ又[illegible]とハ関之ちかくハ物の中を
直さの意にてひたものすきなるをも又意を たるの意なる也
又一百ひとつめの意も詳 琵琶の 相甲をひたと[illegible]
も一ツの意にて ひた兜もその意也又 深武物語[illegible]ま
一ツ又意異也古事記應神天皇の條に字多字多気阿
とあるも其似る 詞之厚義 物に字多気多阿理多理謡ひて
安麻の意なるも之れと信ずへし 又 今案に[illegible]ひたちと云
ハ詞にて云る直路の意にて今いふ道の一直の道路といふ
意なるへし ひたみちも一ツなるかたの意之又 [illegible]
さきる方むき又 [illegible]とも かけ[illegible]云詞を意[illegible]
直く[illegible] 天地懸
[illegible]かなる之

ひとゝ
○万[illegible]集ひちむのとりさへしも又[illegible] 日本書之
らゝうなとりなる[illegible] [illegible]の意ハ[illegible]
[illegible]

○伊勢集
ひとつ[illegible]いとひまそ[illegible]ハ吉野の山に行[illegible]
[illegible]清[illegible]家の[illegible]
○古今[illegible]集
ひとつ[illegible]ひとりなるて[illegible]世にすれハ人[illegible]物とこそきけ
○林本人丸
[illegible]の[illegible]の ひとつひとつ[illegible]
○續後撰集 西[illegible]
[illegible] 人を[illegible]

○後撰集十二 恋四 伊勢兄 今はとてわかれて なにき行かとはすそ
つかはしける 御返し 左大臣 ○伊勢集
ひとつなるおもひは侍さるなる?? 今の心はなれにせまし
○同十七 雑三 大輔
うれしきも のちにこゝろや 人のおもふらん

○続後撰集十五 恋 殷富門院大輔
ますらをはつれなき人をひたすらにおもひつゝときそおもひしよ
○拾遺集二 宗清 出羽弁 同右
ひとつなかにいとふ君とはおもくなりしもなをつみやなき

○源氏物語 初音 むつましき 源氏の御かたのおくにおはします御方と たれか
とおもひたる人は ほのかなる人をみえ給ひて 今はなき人となりける
ませひろくなりしとさりしろかなひつきとなりて 年経ぬるもかなひ
なくはさらひつゝとまてよろこひ給ふ

白衣　ひやくえ

○後漢書廿七 鄭均傳帝東廵過任城乃幸均舍勅賜尚書祿以
終其身故時人号為白衣尚書永元中卒於家

誶詳　ひやうき

○後漢書七十五東夷高句驪傳無牢獄有罪諸加評議便殺之没入妻子奴婢

畢竟　ひけう　ひつけう

○維摩経六觀衆生品七行不壊慈畢竟盡故

逼迫　ひつぱく

○法華経方便品頌二受胎之微形世世常増長薄徳少福人衆苦所逼迫入邪見稠林

ひときざみ　一階　一級

官位の昇るを乃一階くをいふ之

○源氏物語桐壺 女御（大礼）とたにいはせすなりぬるかあかすくちをしうおほさるれは今ひときさみの位をたにとおくらせ給ふなりけり

ひとむら　一首

○夫木抄七　橘　信実

故郷の花たちはなまさる枝そのまゝかたみなりけり一むらの杉

○新二帖

ひかくし　　　　儀之

物のきらゝかなるをひかくしといふハつねにすくれたるにて本字也

○後拾遺廿上 雪のあしたおもしろう侍りし頃まかりてよみ侍る
みえ無をやみて雪のこしかたにいなかたまかりし哉こその雪
いくたびも布のかみかくしひかくし人の侍
らまにせよの…きこの…てくるかき法ひなると言

ひとりごと　　　　独言

○拾玉集一 百首述懐
うき身にハ志てののかくこゝろもえこそせねなひかぬはひとりごとにて

ひきつくろひ

古き歌の詞へ引つくろひてよめりや

○蟋蟀ハ艶上にれぬ鳴を床上なとや出は片ハしひき新とよはし

こゝれなるの声ゝ思へてひきつくろひ成と云つはあるなれ是のこゝま

云ふともくて数ハ表作の二毛まゝ所とよりやうそ成まさ

のゝ見のはの体

ひきうなき

壬生忠岑歌とも之前の字よみてハ二字他の例と云同れ

くさひなきハ歌くさひなきと云義也

○ひきうなき　清武篤末　ひきうなき出意字

箏云なきハ付字之多のなと云きなりなきとこすいまのまの

詞也他例なきとハ他様其あ之如くなきとしてもそこま道

ひとめもる　人目守

後のスナ代ものひとことのすゝとを滝の七きまるなとりきも
日し　人目の関をもまもて　ぬるもまへとまもる之令作ハ
同今をスナとふま日し

○中務集

人目のこゝろはなつかしよふるゝ君ひに錦をおくねなるらん

一書　ひとつまひ

○夫木抄

交野なるみなのまきのを一夜まもひとつまひにいりしきそ子　匡房

人丸集　右十三　信明朝臣集

ひとわらへ　人笑

人にわらはるゝなり

○後撰集十三　無名　めのひかそへつぬへきをはてつかはしける

ねてなけハ人わらへなる涙川のよとに人ぬれとかわぬとも見えん　よみ人しらす

同志　雑二　病して出かたくしたる大納言出家しける

百代にも数りしことのいつはりて人わらへにもぬれぬへきかな　藤原敦政

○中務集

いまはわか身の秋はてまて日暮の人わらへなるなかつむかひ

ひとまかる

○後撰集十三恋五　忍ひて通ひ侍りける人今かへりてなとかれ
のめかきたえおほやけの使（使）伊勢の国にまかりかへりまかれ　未
とみつくと言ひ侍りけれは
人まかる心のくまはきたなくてきよき渚をいかて過ぎけん　少将内侍

ひとめもる

○古今和歌六帖
人めもる山下鳴るよふこゑ君ひとまたれかはひとこともかき

ひとけなき

人とはぬ宿れはいつかくしめらるはてふかきへの雲とも落居　恋人気
難波をもふかしそれと見え

○源氏物語相蓬　かのゆいごんをたかへしとおもひなけきすくし給ふに
ある宿の侍ひかりの川にかかれけれはひとけなき所を
かへしつつおしらひかふるつ我

ひとつごゝろ

○伊勢集又物語　あはれなりけるのちくれはいかにし　はかなきをなん
言ふ人なりける人のとはゝ人なくて
ありし世の事の宮とすむともかれは人と云ふ事なくて

○源氏物語　帚木　世にいくはかりありけることは、むかしと云ふ
ことしらぬ人はなそれなるさかしきものうらみをかけなそ
くいかにすて来てもさあらはなれにとて人ごゝろ
つかさくむかしのうちにさきの世のちきりとおもふこゝろ

ひとだのめ　令人憑

○今しらぬの中のむかしの言ひて人だのめとてはかなしむ
ひの人をはなれてあはれまかせてみるとこそゆるく
なるまゝの行末あるとなきなしくたのめしときも　だのめなると
もいふ　右の来世のまことの行れは先とある故也

○大伴家持集
春されは梅の花さくこゝろは人だのめなるものにそありける
○興風集
○古今集
ことひめれは思ひそめにし逢人と云へとも夢をまことゝ人だのめなる
○源信明集

此世のうちにはをとこうちもひとりまよ人なかめのゝなることもなかれ

○藤原元真集
あさには人なかめする世の中にいつとなく見えしあさなへしき

○金槐集中 恋
きえかへりいはまにまよふ水のあはのしはしやとかる玉のをは[?]

○東屋集一
或きんさらま[?]をかりてかく[?]とて
今はこし[?]木のした[?]森のかけには人なかめをみて両しより

○鴨長明集
秋のくれ身のおもひにたへかねてなかむる空のつらしくは人なかめをみそ 恋三首

ひこつらふ
○文選 西征賦 如子文選訓 ひとつらひ 古事記 ひこつらふ
○今の書に ひこつらひを古事記の里にしてもかけて紅色に[?]あり
ことの古事記八千矛神の歌のうたに見え

○文選第二 西京賦 張平子 巨獸百尋是為蔓延神山崔巍欻從
背見熊虎升而挐攫猨狖超而高援 ○注 挐攫相搏持也
○古事記上 八千矛神歌曰云々 遠登賣能那須夜伊多斗遠
淤曽夫良比和何多多勢禮婆比許豆良比云々
○萬葉集 巻十七 ひこつらふ
いそらにしきぬむてもちつしや、みけなはひこつらひとや
○夫木抄云 右御製[?]

ひとゝなり　偶文選

○文選に偶国を文ホとし上古名下と訓ミ　名良　この訓古代の言には
不いと博士家の訓なるべし其の古来考　○今案に　ひとしく
くらぶの意にて等比と訓べきなり

○文選　西征賦備寄枝末大而本披都偶國而禍結

ひたゝける

治字をヒタヽケルと訓るは中古博士家の傳へなるべし上古の雅
言にはあらず唐太宗の隆国寺御製碑文にも治天巨海侵
鷲浪而霧遊とあるも天をひたゝするの意之

ひたくける　治　ひたさけて　等類

○道元禅師辨道　作よの治祖こゝろつるに坐禅をさ
つきこれを又るおろかなる佛家ハ寛くと言ひそひと
たけて坐禅宗とひきいゆのよすハ情のことむ此間
して　たゞ禅宗といふ之

今案に此詞道元禅師好をのをひしとおもひて正
法眼藏のなまま不と多くみえて有る此の方言
にや是も中古博士家の詞なるへし上古の和歌雅
言にはみえず唐の太宗の隆国寺御製の碑文に
治天巨海侵鷲浪而霧遊とあるを治天をひたたける
と訓へ多余のひろごりて天をもひたたする意にされども
轉て一向ひさすの意となりひたくくはひたくゞく
なの轉にて等比をまちひまたる又等類も同し

ひやうばん　評判　品藻 後漢書注　月旦 後漢書

物のよしあし人の善悪なとの評論をして名ある
ものをいふ也　批評ともいへり

○後漢書五十八許劭傳曹操微時常卑辭厚禮求爲己目劭鄙
其人而不肯對操乃伺隙脅劭劭不得已曰君清平之姦賊
亂世之英雄操大悦而去○注令品藻爲題目○初劭與靖
倶有高名好共覈論鄕黨人物毎月輒更其品題故汝南俗
有月旦評焉

ひまをあく　三

○拾玉集三　花月百首

うき世にハ宿の扉のひまをあけさゝよふる月の雨かゝらく

ひたやごもり

○和秘抄 ひたへこもりハすへてことことくこもる也

寛文六年 板行和抄 清輔

ゆふさとのひたへ籠りは我ひとへ人宿のをりの北雪のうの花

○源氏物語 帚木の巻

○寿花抄 出隠之

○一説ニ理屋之

○泯江入楚

○無名庄のちり

○和泉式部物語
うきたよりひとやこもりと出たへとも はるかの浜ハうちもてしよ

○うつほ物語俊蔭巻ニ 明りゝてかれが南ありし ひとてきまる
えんちきりふかくハやまでもやあらりきあらん とふか消伏まさら
ひつれハひとやこもりへとそ御ありんびん ありく ーとく
こまりのふかとよ

○蜻蛉日記曰 みまハあまりかへりたいとしてあ道と出居りやをと
ありぬ世界もやあらえ今日なん二月十日ねとをもかう
あこそなうまんれぞ をとるまい 今ひとやこもりなん清出
ゆてよまそことのすゝまつれそう

○狭衣物語 かひくしき消えまもありけらとえ南られーまちも
つまかなれと大弐まてても今ハかゝりしもひたやこもりよ ありけれ
なくやいまにてあるしみをふへき

○中務内侍日記 はゆるひとやもりありんもさすかなれハ出あひ
てあこまて法かりし侍り

人まつ虫れ　ひとまつ人

○中務集　朱雀院の御時に若菜めしに

今さらに君のたまはる日の人まつ人なる　わかる　つむらん

ひとなみ　人並ニ

○夫木抄ニ　夫木四ノ国　閏三月　寂蓮居　為家之
あさましや　行て帰る山路を　人なみに　又　つくしなふ

ひもかゞみ　紐鏡　同
衣だちのえもんと云ふ　さいとて　紐をさし結ひかゞむすると云
まれとくさ同かしてと云ふ　にあまさぬことなりと云
かゞみはかるとかすと同意也

○十訓抄ニ　まかせる　人をなくしはてたる　おとけ結ひまで
さしのて家いゑへこそれぬまかせこともうまだしく　紐さし
かゞみそ　人をなしりその底をさむる也

ひとやりならぬ　此人引

○人のならはしにはあらて我心からとくとゞまるといふ之
行をも遣ともいふ　万葉訓せ人のやまず　ならぬ之　千紀の行
古今集には　ひとやりならぬといふ語

○源敦忠集
かりし人やりならぬわかれはなかれけるに人こそまさりけり

○蜻蛉日記中　物へまうでしときくといふまゝにえのたよりかけ悦ある
もこゝろとけてなく鶯はとゝと思ふ者もろくこと以みしけき
まさる物思ひの住まゝ　人やりならぬ　いさなれとをひとふといふぬ人
なりとも思まつくなと思ひきなりつはいとかやまくてなりそこ

○いさよひの記　ねん九乃記ことに千れそかるそく思へれども人やりならぬ

たちかへりいまはつらきとなりにけりおもへはいつかあさき心を
いまさら出ぬ

ひとまつかね
人まちかね之

○玉葉集
ひとりねにひとしきくれを世にそれは人まつかねのおとこそきけ

ひとあしかりし

○枕草紙上　かやうなる所にかめそとき女ハ宿直するゆう去歳しれにかくうとへぬれハ人あしかりしなとひしやうハ

ひといきもせぬ　　不為人分

人のみるけもなきをいふ

○いろは集　世間の心得

みなそこの人はきもせぬ物ならハことを波ハなれさりし

ひとつのくすり　　至極

○椿玉集曰　由来生老死三病長相随除却天生人間無薬治

さとり行ふ人ハ信ずれハ三河の病をなれハのぞまん

ひとめこそあらね

○ひとめこそよきて　不一方之

○源氏物語東屋に新古の歌をかけてよひなまし之

○拾玉集云　法華堂法華の歌よめる

とりへ山にはかり小萩見つる哉ひとつなきぬ人のなけき哉

ひきもこえたる

○源氏物語花宴　紅梅のきぬかさなるとひきもこえたるさまことに
半靴すきしたる

日八
二十八日なるめの壺装束にハあけてそ引たこえしるかなて

日十
華帯のかうつきたるをとみにきるにひきもこえてむしさ
きのさしぬきも雲ほそえて

○栄花物語　かさねたるのえとのえとハあかうしに
花やうるあれハさへくるに茂萱かといひつき紫ちかく
とくるもつなるたまれハいふまたし

言語部

巻廿

ふ　生

生きとしの一言にヽくかハおほかの略之累畳紀に要因至因

をはるふまてもふとまゐらも邪即気すまれ生の言るれは我因

とかける筆詞まゝよあハ之言の多葉生はむさらふはむさらむく

らふたまふの花糸毎

○散木集　花　○夫木抄 旧　後拾

けさみれは花を枝にまたすりなりて風にまかせぬかなといふ

運と

○ふと　古

細のうし人かたきかへるをもいふ事なり

○古事記上 天香山之五百津真賢木(マサカキ)矣根(オネ)許士尓(コシニ)許士而(コシテ)於

下枝取垂白丹寸手青丹寸手而此種々物者布刀玉命布刀御

幣登取持而天児屋命布刀詔戸言祷(ホギ)白而云々

○ふる、

ふく　振　霤　ふる

ふるひこゝろをいふ　ふるき昔は布伎(フキ)〔枝〕ともかよはしいひし之

やまとたけるの花を刀挿みは二上山根と古事記に伊弉諾尊

の十拳剱を後手に振りつゝ逃来ませるとかいふことも後手布

伎都ゝ逃来ませると書り

ふしき

ふるきみやこにまつはる今も旅の狂言にこの事あり

○拾遺集中　いとまきこえしくせなあしくこひしきことのなき

くさ枕をかりて二年にもなるとききて引ちかへ

さしはへてやるやとふせよ

○同八　昔の世にいたる花をつくり侍りて所のさ苑にけさ折のみなと

なり侍りしあやしき苑はのこるなりけるを侍るは去りぬ人とも

いとくらくさしおしきたるこえきこし今は一すきまがへのほかに侍り

きろくと書てかきてたり

ふしみ

○古今集　伏見

菅原やふしみの里のあれまくもおしけれはこそかくやはなるる

ふける　ふける

此ふけるとは、ふしける事をいふなり。さはいふも古今集の歌に菅

原やふしみとは、いやにもあれとかはりたるにて、ふしみを伊呂波不都合と

訓もあるにて(源氏物語)にも見えていふなり

○拾遺集三　住吉百首　甚述懐

伏見の松のしたはもなかりけり我をはかなく思ひしもなる

風俗　ふぞく

○法師等上 宗旨僧 は出家するのみにて世をさける成しんさとひ仏し
て後のまたんとたくお法師ともみて健あるならひ法師だちなど
かりしひとく風流の様子あるの勤意ほはいとるをいぞ気風せい
の勤まえくとめ人く双紙の作りなまきするはかきれこと

○ふたう　不当

物の事のやうにあらずさる事をいへるといふ中にもそれより軽く
人の世中のしきたりと人をもいへるにもよろしく用 ―

○明月記嘉禄元年十月廿三日於予如気不当者也法性寺不可然之

○ふよう　不用

かなふよのことを不用不要ともいふ是之云へさはりなきにもある
しかるに事くの不用を用ゆれとも不要と云へてそやうなりそ
の所にまかせてたるへし ―

○明月記嘉禄元年十二月十日　又伝云此所用常ニ遠ロ狂乱ニ近カラ不
難乎也不物制法

○白氏文集

○淮南子十二道應訓大司馬曰子巧邪有道邪曰臣有守也臣年二十好捶
鉤於物無視也非鉤無察也是以用之者必假於弗用也而以長得其用而
況持不用者乎物孰不濟焉

○同上十三氾論訓夫存危治乱非智不能道而先称古雖愚有餘故不
用之法聖王弗行不験之言聖王弗聴

○同上十六說山訓魯人身善制冠妻善織履往徙於越而大困窮
以其所脩而游不用之郷譬若樹荷山上而畜火井中操釣上山揭
斧入淵欲得所求難也

无双　ふさう

○後漢書廿七丁鴻傳時人歎曰殿中無雙丁孝公　續漢書亦同

○東漢觀記上歎嗟其才号之曰殿中無雙丁孝公

○後漢書七十上黄香傳香家貧内無僕妾躬執苦勤盡心奉
養遂博学経典究精道術能文章京師号曰天下無雙
江夏黄童

○風味　ふうみ

○輟耕録八白湛淵先生續演雅十詩巻揮之二八珍殺龍
鳳北出龍鳳外荔枝配江姚徒誇有風味者謂遠北八珍
也右八

不吉　ふきつ　凶之

○後漢書 六十九上 孔僖傳 冬拜臨晋令崔駰以家林筮之謂為不吉
上僖曰子盍辞乎

風流　ふりう　ふ里

○大鏡 五 帝かざりなくおはしまして人々まねひあやしきまでいたし
られたる建八年ともしこゝろに金をもてとそしいかなるすまし
とおほえそこそもれまなり答ける

付屬　ふぞく
つけたのむるのこと之

○法華経 七 嘱累品 廿二 我於無量百千万億阿僧祇劫修習
是難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付嘱汝等汝等應
當一心流布此法廣令増益

ふゝよう　こゝよう　むゝよう　とゝよう

○源信明集

此集天暦新めつらしきまゝに続きたることなりけれはこそあるよし

○日記歌仙を引て云こゝにいふ二歳三歳なりと日本紀に六歳をむすめの志とよみ十歳をとをと訓せし時の字をよくとむねとゝと同歌にて通ぜれハなりしなり

○今案子論語学而時習之をまなひてよろしくこゝろをしるとあるハ時にハ相まなひしとつゝしみぬへし

王昭君

似たる之似付ぬハ王昭君かりぬとのふ之似よるひ
なるとも以下挿の聞て此はるかを掛かさきたるよりまた古く
の似たる之

○大鏡第六　内大臣道隆　大学生とも召つめて作文しけるに左右
みひけるに今日二三十人ばかり唐人の詩ともよみ付ていて
うちみひれハふさましかりけるを人とハ出来れ道ともの座に
て管絃中にもあそひたり座わけこたへりぬれとも　是を
しかりしとのるとてそいまにかしこきなれ

○ふくたる
ふく垂る字鏡之 つぼまき 佛の口傳(傍)より出たる之
○めれとめさらし思ふらんはすくもあしくもこれを得て傳入ん
つぼまきくちつぼまも(沫)おほふ字海に見えひろげたるのは宜しく之を見の
ひろきくち(歸)すりはなふくらして好む之いゝ字にうつりきくちつき
もきこゆなりに

○ふくらか
文選に豊盈を注に肥満と見えたり 出於

ふくだむ
ふくれ垂たるの意なるべし 壒嚢抄に心地鈍經になるとして
鼖毳の字をよめり 字書を考れは鼖毳は散乱貌と見ゆる 其色のふく
くれたるを云なるべし 陸氏 相經 紀楽賀に ふくだめるくうちふくだなる一に
ひんくきと見え 細書にもまたしふくだこ きたなきがうきとおもふあれ
髪のふくだみたるを云へハ 此又字のつきたるにてしあらめの髪を出し
をびんふくともいへり 古くハ男もせしたる書に見えたり

○はなかつら花ゝ
いまきこえたれゆるかすし みつる身のむすびたるもきこえ身も
こそら我かたらぬ○日びんのおこりふくらめそうらの引つる美しくき
おしの道たるにきこえとけ見えふくたこれれば思ふしき

あらし

今係まて了紀たる人あまたといひつたへ

○今昔物語廿二 今ハいとたかき哀たまふのことのよしをきくとひとし

く足たちりもえあへくとしにつきゆきて面く目代のもとにこ

○あひ婦る

○後撰集十三 恋歌五 ことなる物いふときこえけるに女の親侍の 君 忠

あひ人侍らさりけれは すまひ宮の頼ら

めしのくるまゐてたりけるをみれは月のぬれきぬハひるよの物し

久し

あひかぬ人のまたしらぬぬれ衣ハおもひにあへす今かわく人 中将内侍

○在原元山集云々しくこまかくて おぬ人に

○在原仲文集 こむしきみむすひしたかひのちかくありて物をとはれ

女のまとにて そのよハここに後の夜きたるよしかハ

ほくうこよハ とこうりや今夜のつまの玉之まかたや いかにかたしく

○古今六帖 大原 ○あや

きみまちのよのみさかきりにまねくよ ふたりのことハありきに しや八

○大鏡 第四 太政大臣頼忠 小野宮実頼一男 [illegible]
[illegible]の[illegible]の中に[illegible]
[illegible]
達おもし[illegible]

○史記 一百廿二 酷吏列傳 揚僕傳 温舒為人謟善事有勢者即無勢者視之如奴有勢家雖有姦如山弗犯無勢者貴戚必侵辱舞文巧詆下戸之猾以焄大豪 ○注 君音熏 索隱曰 熏謂熏灸之 謂下戸之中有姦猾之人令業之以熏逐大姦也

○蜻蛉日記 上
ことなく綱の[illegible]
[illegible]
[illegible] ○左京 [illegible]三条[illegible]
[illegible]
とかく[illegible]

[illegible]
ことの[illegible]

○徒然草 上
[illegible]
[illegible]ある人の[illegible]
[illegible]

返し　ふたゝびとはましきを　たえていふ之　二二ま

○後撰集十恋一　いひわたりける人につかはしける　伊勢
いつしかとわかひと川をわたりてもつくれもなきら[illegible]

○伊勢
あかしつゝまちのくとまつにかる[illegible]

○後撰集九恋一　伊勢
いそかくれひとなをわたし[illegible]もつらきなけれ[illegible]

おもひ

○拾玉集六　略秘結若
たつたかは浮世の人のおもひは[illegible]秋の山の[illegible]雲

かへしていとゝふかき色出之

ふりさく

○春雨六帖集

なら山の尾上をふりさけみれはとほくまさりけり

山たかミみ下のさとをふりさけてみれはかすみのかゝりけり

○壬生忠見集

山ふきの花のさかり岩手の関ハこゝろふりさけてとゆくあ

ふりさけ君かなかめしもとの松ハつれなき所のワか所之ほり

○精抄見枕 下 又の月といふハりりま山桜草のふりかれハ異説

また二季にあたりもあらぬ人のふりさけ空を拝せし

かゝる ここ

○古今集 春上

春日野のわかな摘にや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん 貫之

○歌ハ袖ふりはへてとハ袖うちふりはへてといふ事之てとハすむて

ふりはへて其と云詞之

○容動其振て仮作不可来述

ふしのま

一節間またとして短きことにいへり又節間ともあり

ならもあり

○詞花集

あさまさりみとりの竹のふしのまもこの世はさしさとや

○後撰集 八 冬 源氏朝臣のかりして家のまゝありけるをよめる

けるをみれハ

白雪のふりしもして こそとふらへぬ身となる名をすゝきはなせん

○其外散在 永保三年 源師俊卿家歌合 法橋

○六帖

ふりはへて秋の来れハこと錦ふりまさるらし

春雨のふりはへにけて人まつハ八瀬川の

風塵　ふうぢん　風部再出

唐侍ふ下ゆ詞多とま多く然えて用のかる世の乱逆ともをいふ
八隠隠の的ちと見ゆる也王八三国ともさ然とてもいふ

○後漢書年祭肜傳肜之威声暢於北方西自武威東盡玄菟及樂浪胡夷皆来内附野無風塵乃悉罷緣邊屯兵

○同上卅下班固傳設後北虜稍彊能為風塵方復求為文通將何所及ここ　○注相浸擾則風塵起

風俗

○文選長笛賦馬季長　ふうぞく　各得其齊人盈所欲皆反中和以美風俗

○注漢書王眞曰廣教化美

風聞

○文選奏弾王源沈休文　ふうぶん　源先喪婦又以所聘餘直納妾如其所列　ふきこえ
則与風聞符同

風流 ふうりう

○後漢書 四十三 列傳 高士傳 序言 夫然豈其枯槁苟而已哉蓋詭時審己以成其道焉余故列其風流區而載之 ○注言其清潔之風各有條流故區別而紀之

○同 七十三 逸民傳是以堯稱則天不屈潁陽之高武盡美矣終全孤竹之絜自茲以降風流彌繁長往之軌未殊而感致之數匪一

○文撰 琴賦 嵆叔夜 然八音之器歌舞之象歷世才士並為之賦頌體制風流莫不相襲 ○注李善曰仲長子昌言曰棄其風順此流而下去誰復能為其限者哉

傅會 ふくわい

○つけはなしと訓して物とよりあつむる之張平子か二京の賦 送り
しゆうとよくするか物をよくあつめなとりふこれを文轄て八章台付
今え八何は取をも叔み偏法いひるとをもいふてこれ八莫文と
数文との日ち及於と八祥字の本ををも此まもいふへきかなし

○後漢書 四十九 張衡傳衡乃擬班固兩都作二京賦因以諷諫精思傅會十年乃成

福德 ふくとく

○漢書 孔安國云所好福德之道

不可思議　ふかしぎ

○維摩詰所説経　一名不可思議解脱○注什曰亦名三昧亦名神足或令脩短改度或巨細相容変化随意於法自在解脱無礙故名解脱能者能然物不知所以故曰不思議ここ　肇曰（後秦釈僧肇注者也）竺道生曰不可思議者凡有二種一曰理空非惑情所圖二曰神奇非浅識所量ここ

○維摩経ニ不思議品ニ　維摩詰言唯舎利弗諸仏菩薩有解脱名不可思議若菩薩住是解脱者以須弥之高広内芥子中無所増減須弥山王本相故　○注肇曰夫有不思議之迹顕於外必有不思議之徳著於内覆尋其本権智而已乎ここ　以下略

文筆　ぶんひつ

○法華経五安楽行品ニ曰菩薩摩訶薩不親近国王王子大臣官長不　親近外道梵志尼揵子等及造世俗文筆讃詠外書

ふでいづる　据む　ふでまて

ふですさびハいたづらに遊びあそびかきなぐさむ云ふをいふものを云ふもの

特になきものなれどそのことばつきをいふなれ

延とてかきつゞくの意

○伊勢集
梅花ちるてふなへに春雨のふりでゝなくうくひすの声
○藤原元真集
あきはきを まつはる人のわれは常に 木かくれ 桜さへ いもりくし
秋の花はちりてなき君なつかしきを はらさで吹よる
雲ゐにそ 吹付
○夫木和歌 初秋巻
松風の昔の秋に吹しかは 八十湊より 吹つたふ人
○海道記す
○藤原元真集
雲ゐにも 今はまかれ人あしへ 春香あらかす 鶴のひなとぞ

みえしたく
みえしたき
○紀貫之集二
夢のたゞちしたくこそ 本下 されいして雪わけて来之けり
○拾玉集四 天日法楽百首
いなのかさゝき橋の小笹にうきまき 康 康云はなけく輪の山本
○金槐集上秋 康
秋萩の咲てし家は秋萩の花にしたなき 康云同なし
○続後撰集
○散木集 夜雨中 俊頼
冬の夜の枕の春のみえたきひとり中にまに柱明之
○夫木抄 八夜

ふみはなる　蹋蹴

人をふみ（とら）く足にて踏付るをいふ也

○後漢書　七十六　陳蕃傳遂執蕃送黄門北寺獄黄門従官騶蹋蹴蕃曰死老魅復能損我曹員数奪我曹禀假不即日害之

ふきまくる　風發

風の吹事のつよきハ俗に屋根を吹まくるといふさ發屋と書てもさしへハたゞち吹まくる意なり發吹又是云とふ事も

俗ニハ語ニまくるともいふ

○拾玉集二　従者百首雑

従者ニ新春のきしきハあさく霞まくる庭のまへの風

霰かこり

今俗にハ吹雪をいふこそいふ物をいへり 猶いはゆるいふ言也
又いふうきかこりまた晴天の言に見え春日旅ぬにハ枕詞なり
とぞしこれとも 枕詞といふ字も見えねど いふべきこと之
又古の文言ハ多くとやかく自然の中にまた見え不来る之

○清少納言記十 かゝる日にはと哉 言わりていふハ 雪まるまる降り
○花暖ニ歌ニ既種之多を言ひ かゝるニ其る之

雪ニ志て

猶ふ書も同意之 志て八雲之、

○夫木抄八 百首

夜接の中にかこふ志る重 ねる鳥ハ 志あれや志る人志なり 衣の花

題不知 俊成 左輔

ふりさけて　上三言ふりて　のみならず　ふりさ

○万葉集のうた　○後撰集十二恋三　猿丸大夫

ひさかたのあまのはらひろきひとつによそのつゝ

○壬生忠岑集　○後撰

ふりさけてふりさけみれはねさめてふりはるるあまのとはりのかけそくれぬれ

秋歌

ふりさけて見ればあまのかは　秋のつきふりさけみれはあまのかはらに

○源信明集

年をへてわかひさきたる石上ふるきもしらぬ世をふるかな

ふりさけ　廿二

かへりてはふりさけのうたにもふりさけみてもふりにしとのうたにふりさけと

○前漢書八十一　匡衡傳　将軍以親戚輔政貴重於天下無二

○ふりさけ

ふりてこそ　取意

○源氏集

みなとこひ取てはひとかたみのなくなく新ぐるみのたえぬ山引

不退轉　ふたいてん

○維摩經巻一仏國品　已能隨順轉不退輪　○注肇曰無生之道無有得而失者不退也流演圓通無繫于一人輪也諸仏既轉此輪諸大士亦能隨順而轉之別本云轉不退轉法輪什曰法輪無生忍也以輪授物物得此輪故名轉授者詩而不失名不退轉自棄轉進亦名爲轉也

あまさけ　天台

○夫木抄廿　江治元年百首

難波人あまさけ見てし人雲かゝる伊駒山の初桜かな　従二位家隆

みこもおきゐ

○拾穗集

菅原やみこもおきゐる人さへみ秋まてや　阿るる

ふかきこゝろ　　比深

○続後撰集十一恋

いつのまにかはりはてけん人ごゝろおもふ心のふかきこゝろに

○蜻蛉日記中　父の詞

とのおもひのふかきなかりしかれどもおもへば底の深きもあはれなれ

○後撰集九恋一　　貞文

君をおもふふかさくらべにつの国の堀江みにゆく我にやはあらぬ

同十一恋三　　読人不知

いつのまにかはりはてゝん君ゆゑめおもふ心のふかきこゝろに

ふところ　やさしき　　懐狭

ふところは懐にて胸のあたりをいふ其せまきは物の入らぬをいふなれば人の胸のせまきをいふ

山懐なともいひて同じ

○閑居友下巻承久三年西山庵主作消息記者に月輪殿の事にありて

この京の人はなにかはなきとしけれどもかゝる事もありてはかなくかゝりのこゝろもなくてのことにてかくなりにける

よるの夢にさしてくやしかりける

ところやすくたのみけるものを

みことのりかき　瑞裏

○良玉集

ありけるを瑞とうたひ侍りけるに　明くる年の正月摂川の稿

言語部

巻廿一

方　方　古事記

○万葉集一巻舒明天皇遊猟時人麻呂が歌にあり　これの説

は正字にて仮名にあらず　又は音の字を書

たり　方の字をあてたるなりとなりて　はといふにかたは二つあり　一つはむき

ひてといふもの　又は方の字を以て書きたるは　海山のはしなるを

めぐりて皆方のことなりといふ　又は字をかく　假名も書く　ありとると

訓は方といふなり　又字の字にもかく字　とりかへて字をかく

といふは　ひとつ子の座の長さ　一片月　万戸擣衣声とよみ

句をはじめ世の人のとりて作れる詩の心をとりて　一方地と

いひしはよくかなへり　○万葉二皇子吾人行方不知又其

又同其倍之遊方云々　なるとありは濁るかなれと皆へりけ

なるは濁る　そのめくしかな

○古事記上 匍匐御枕方匍匐御足方

○万葉五 長歌
父母波枕の方尓妻子等母波足乃方尓囲居而

匡た

○後撰集十五雑一 大友黒主
なまちゝまゝの足りめとおひたゝかさつ頭に抱かつく為はし

○便利 一人里
前漢書五十八元信傳 大后知甚為恭求垂怒罵之曰此属父子宗族蒙漢家力富貴累世既無以報受人孤寄乗便利時奪取其國不復顧恩義

○後漢書 七十上 杜篤傳 地勢便利介胄剽悍可尓守近利以攻遠

邊鄙　へんひ

○文選第一西京賦張平子　爾乃商賈百族裨販夫婦鬻良雜苦蚩眩邊鄙○注杜預左氏傳注曰鄙邊邑也

店ばす

○方数右年安決云物をこまとなへつるなへと云ハ何事ぞ耗の字をへてとすむ析字をへつると讀こへぐはへつるかハ周るこ日本記ニ新羅国ニ析と絡り

音読

平均　へいきん　訓ならし

○白虎通辟雍ニ王制曰天子曰辟雍諸侯曰泮宮外圓者欲使觀之平均也

辯口　べんこう

○後漢書列女曹世叔書傳夫云婦徳不必才明絶異也婦言不必辯口利辭也

ほの　朗

○ほのといふは同しほのくもほのかにしく之朗なりほのは反字
曙とあけほのほのかなるほとゝいふ

○源順集
ほとゝきすほきこえ給ひはほのかに都のまつ花さかりけり

不逢　怳

あふことかたきをなけきて心のまよふを云也庵をもおもひわかれ
と訓せり不逢中をいふと釈侍りて見えて侍り文選に怳を不逢てと
よめるも侍れり

○文選第一西都賦 班固 攀井幹而未半目眩轉而意迷捨欞檻而
御倚若顛墜而復稽魂怳〻 音况 程反 以失度○注長門賦曰神怳〻
而外淫○王逸楚辞注曰怳失意也

○徒然草上 廿五 中ころのすまひに辞りて夢の中にね夢をみたるなりていと
かなしく不逢ことをおもひなれたる了人〻かたかたなかめぬ

○金槐集下
なましゐにおもひかけ見すれなくなりしとき音をいと忍ふらん

本意　ほい

○後漢書曰張敏傳臣伏見孔子垂經典皐陶造法律原其本意皆欲禁民為非也

ほだ―

○新大方廣佛華嚴經巻四　羈鞅○希麟音義ニ上居宜反下於兩反王逸楚辭注云以革絡馬頭也釋名云羈檢也所以檢持摩絆

ほだし　羈絆

○藤原興風家集

○後撰第一春上　紀義戒部

山風の花のかさふ麓にハ春の霞そほたしなりける

山里ハ春のほたしもとられそすらまた[illegible]

○古今集

世のうきめ見えぬ山路へいらんにハおもふ人こそほたしなりけれ

○後拾遺第十上

[illegible]ぬみなかゝる名残のこゝろをすてきとつひしこそ[illegible]おもひしめくし

○ほどろ　荊之ほどろ〳〵ほどろかなといふ

堀河百首　俊頼

おそれとらのあさましいかにほどろなるらんと

今俗にほどろといふ是をほとろの髪などいふ同

ほこる　　誇

○夫木集　初春　　ほこ尾かとも四ミ又名

はるさりする手綱の海人ほこらしき浦風めでたしける

○夫木抄　未一　初春

ほづえ　家枝

ほむら　　種来

○夫木抄

冬ごもりさへなれまゆみ大和の池のけふ若菜　良一法師　積もる

ふのこ　ほのすこの略語之

○居舟集

ふところに　ふのこ　初音ゆかしき

○夫木抄八　うぐひす　好忠

ふるし　忙　悦

文選ニ讒悦ヽ以失度とあり悦ことを不意でと訓せり

悦ヽ失意と釈りいのゆ

ふれ初にまかりしも同し意也

褒美　ほうび

○後漢書光武十三廿二東平憲王蒼傳臣蒼疲駑特為陛下慈恩覆護在家被教導之仁升朝蒙爵命之首制書褒美班之四海○同七十七西羌傳顕宗初為臨羌長与捕虜將軍馬武等撃羌眞吾功冠諸軍及在武威ヽヽ声聞於匈奴食禄数十年秩奉盡贍給知友妻子不免操井臼肅宗下詔追褒美之封其子穀為明進侯

○白氏文集明本四十一唐故通議大夫張公神道碑章下丞相姚元崇可之致書褒美尋改太原府功曹参軍

本據　ほんご

物の本文のよりどころとなる事をいふ又は本據とも書けり本據とも云へり

○後漢書荀彧傳操上書表彧曰云々彧若南征劉表委棄之際饑軍深入踰越江沔利既難要將史本據而彧建一策以亡為存以禍為福謀殊功異云々

放言　はうご

口言　はうごん　はうげん

はこまう

はこらしきといふ事同じ詞又は驕をもあり　はこともも三書けり

○太後帝也此太子のかりの後の陽根本して取云の字也とも云ふといふはいとはるかなりし法子をもちつまるとはこのかめいはゞはこまう也とはいはれぬ事にもあらずといひける

○ふけやか
○秋萩も相撲よまひ二八ちり尽ぬ風の音いさよふ水に落
紅のあをあをきたる一の男はふけやかにけさへ門によりなみ
色好のもろくとかけられたる庭まで日月のまへなひあけやかな
るなりけり 秋の色ふかく人の目に着こそ

○なまく
○今の世にあつ御のうへあつて坏もまくとさまなどいふ 色の方
まみまさていやなる事
○めのとのさうし はなかりい夜なかに いろなし なれしとふれ
くさのめしに ひたひ はなやかにまして 春あさきまてるも見える
しくは

○なれく
○秋萩も相撲花てまくらにおちかかりのもとをあつてなれ
なきけるまるぶきのめくまてゆりくとかかりたる菊の花だ柳
のなにうちかとりれて引とてあへる秋なれくと見ゆる
目つき 菊の面なひなりたる所

○なのく
○川花集 あをつらなとしてや夜ふ人なのくとなんしとさ あるまじうて
○古今集 ならくとかりの う家れ 船雲に帰く迎ふ約束としてなまめかし
○源明集

あけし

あはしといふ言は用ゐるまじき言なりといふも同し言也

○沙石集一巻の中に慈鎮和尚の兼話せられけるに法印宣
長法門の人と仰せられし事はめでたく殊にあはれ(?)ひとの法
門不審申されけるに[illegible]とめでたく家の
事を問申されける時法印に言ひて是をまうしてあはれ
とおもひ[illegible]て[illegible]和光同塵の名[illegible]て忘るな
とおほせられけることなるべし[illegible]おもひかへし

あとし

○万葉集 三　師大伴卿 巻の中

○万葉集別記三巻に[illegible]の字を多く用ゐしは[illegible]字は[illegible]にて
[illegible]之と[illegible]ぬ[illegible]とて見ては[illegible]と[illegible]
[illegible]はいと[illegible]は[illegible]なり二つ[illegible]は[illegible]
[illegible]を[illegible]見えて[illegible]つる[illegible]此[illegible]く[illegible]
[illegible]とせは[illegible]と[illegible]し[illegible]中に[illegible]は[illegible]
[illegible]保[illegible]に[illegible]に[illegible]の
[illegible]は[illegible]と[illegible]は[illegible]仍て此言は[illegible]
[illegible]と言ひこそ言の[illegible]こそ[illegible]
の[illegible]や[illegible]の[illegible]こそ見え[illegible]と[illegible]の

云は危く近きにかきるをあらはす。まことに人のたまを見
たゞなたる見とてやすみらん危き云ことは本由ありゆみ物者やすは法部
おとろ三韓の役の斎に於村燎ホ代猟（ホツくにシ）之國手斧ともれぬてを
戦に様さんとする時まとさけらるゝ、其之大事の辞やすありて
ことのあれ果するにかくりなる人の手ありといひしは保元保元之
示佐琵琶君と（と）をさひてこふりえを死ありといひてきて言をえへ
は説やまとひて死をえとせしてやるかぬ能丸ハあるとしの云ま本
まり危き云ハ何かき

右より　　折骨

○後漢書五十三李固傳昔昌邑之立昏乱日滋霍之憂悔発憤
悔之折骨

右とる　　道

文援潘安仁が寡婦賦に口鳴噎以失声兮涙横迸而霑
衣と坊る横迸をよこしまれ右とこりてと訓て涙を迸散
えやうと見之へれハ涙の為のめくる落ちるく右とおしる様
なる筈云ふるへし

なのめく

なのめく　なのめなるの意なり目口なるのまぎれ人とまぎれ
まことの意の　なまめくとうるはしき　なまめく八雲抄とはいふを曰
く俗にいふなまらしきといふ事に同じ

○後撰集十二 恋四　めのつかひける　読人不知
かけてなの　なのめき　つまはなのをりしのことを　ますらをのなれ
正
なの又ても　めずらしげなれど　せめてなれなくて　やすらふかなしけれ

○拾玉集一　宮路山吉只　秋
中々に　なかなかなのめく秋の色もなかりけるものを　暮ちかくなりてや
見るに　暮る月の　なのめく　空に　秋をとめてなかるにいづる　山端の雲
日影　晩更人々見
きえをりて　蟹に　なのめくともしらぬまに　見まよふ月の　おきてなき

なから

古今集ま　恋のあはれ　ほりて　くまと云訓ま　羽

○古今集八　離別歌　紀郭公　源仲正
かとこきはまてもくて　恋のあはれなりけりかよ　こそ鳴かれ

煩悩　なやみの事

○大智度論　煩悩者能令心煩作悩故名煩悩　又云
属嫉属結属病是名煩悩

本邦　ほんほう

○後漢書下亭蔡邕傳者韓安国起自徒中朱買臣出於幽賤
並以才宜還守本邦

本朝　ほんちやう

○後漢書廿三竇融傳融既深知帝意乃与隗囂書責讓之曰伏惟将軍
国富政脩士兵懐附親遇厄會之際国家不利之時守節不回承事本
朝後遣伯春委身於國無疑之誠於斯有效

褒貶　ほうへん

○後漢書廿四馬嚴傳嚴上封事曰臣聞日者衆陽之長食者陰
侵之徴書曰無曠庶官天工人其代之言王者代天官人也故考績
黜陟以明褒貶

放言　ほうごん　ほうげん　三言にいふ

○徒然草上百六段高野の證空上人京へのぼりけるに云々　上人猶いき
まきて何といふぞ非修非学の男とあらゝかにいひてきはまりなき
き放言しつと思ひける気色にて馬ひきかへして逃られにけり
○大鏡第六　此兄の沈居にてならびの関白云々　左大臣ちかひやまて
なりし事なりし　注なりしまへく見するまゝに　あなかしこきこゆるや
いかりのなかりしことを大こそこともひはしにかくれへ　明理行成一双に

いまハのひしりも一の大納言まて いとやんことなくてさふらひけるを
よへまゐる讃岐の前司古文経の敦方とこらひておほえけるか
まゐらせし按察になりたる徳大納言をきたかひて

万葉　なりやく

○我君ハ下 兵庫頭やのまいらする数財丸ありける本稿にも
書りしに 其を能色なあひつる時に本厳をぬりぬと聞
りしよりしかれこそ和相若加と見るハ万葉なりたれ
ぬきて見のよこれハ兵庫なへいりれ人やと言うてき

なとくし

○六帖
富士の山なるミこそ 不尽の煙のなとくし今も如何なと之

○なこりしさ
○壬生忠岑集　忠岑　古今
これを見るハ古人の忘られさるもの志まれ、なりまなこり見えと、ゆりて
ちるれなきけも見なくさとひこそゑハなこりしきかくハ忘れとなれとてあらり

なげくしき

老をおいたれと訓るは老をはへたり　なほいかにけるてふな
ひいく方なくちりたるといふなれくしきといふ同なり

○大鏡第三　小一条院　三条院のおほしめしける心もたえはれなや
みひまける後はよのつねの宗室の御様もなく後上人なと宮
てはゆひやきまさまふやもれなりかしつき了人なともなくいとあはれく
まきものくかゝるなく御あり案されけるさまそ悦めでたかりし　法師さ
まのごとくなけくしきこそあらまほしきものにれと云て

なとくしき　玷

なえとしき之物なとよりせまりたるをいふ詞にて気味わるき
をなとへと思ひ悪しといふなめり之

○後撰集十七雑三　人のもとよりたゝらひちりまうでて　なとく
ものくすすめ侍るといひて侍りけれは
閑院大君

本懐

○文選謝平原内史表陸士衡遥ニ本懐実有可愍
ほんくわい　なかい

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan